

ブラジル第二アリアンサ鳥取村 入植90周年記念

鳥取県議会訪問団 報告書

〔平成28年7月20日（水）～27日（水）〕



鳥取県議会

1. 訪問日程及び訪問先

平成28年7月20日（水）～27日（水）

ブラジル連邦共和国サンパウロ州 詳細は「4. 主な訪問日程」のとおり

2. 訪問団メンバー

○鳥取県議会団

鳥取県議会：藤縄喜和副議長、森雅幹議員、福田俊史議員、事務局 尾崎係長

○鳥取県行政団

鳥取県：野川統轄監、寺谷教育次長、交流推進課 北村課長補佐及び山橋係長

3. 所感及び県政に対する提言

今回の県議会によるブラジル訪問は、ブラジル連邦共和国第二アリアンサ鳥取村入植90周年記念式典に出席するとともに、ブラジル鳥取県人会等との交流を通じた海外移住の歴史的意義の再認識及び今後のブラジルとの交流の深化を目的に行った。

まず、第二アリアンサ鳥取村を含むアリアンサ全区を行政区とするミランドポリス郡のフランシスコ・アントニオ・パサレリ・モメソ郡長及び郡議会のニヴァルド・アパレスィド・ヒベイロ議長をそれぞれ表敬訪問した。訪問団から「今回の訪伯の大きな目的の1つは、ブラジルと日本との交流の歴史を再認識し、次の100年、200年に向けて相互交流を深化させることにある。遠く日本をあとにした先人やその子孫が当地で大変な苦勞をしながらブラジル経済の発展の一翼を担ってきたことを誇りに思うとともに、日系人や鳥取県ゆかりの方々に対する郡の支援に感謝する。」と述べたところ、郡長及び議長からは「ミランドポリス郡の日系人とともに暮らせることは大きな誇りである。ブラジル社会において日系人が果たしてきた役割は非常に大きいものがあり、感謝している。」旨の発言があった。郡長及び議長から異口同音にこの地の発展に寄与し続けてきた日系人の存在の大きさが語られたことは、非常に印象深く感じた。

鳥取県からのブラジル移住の歴史は、今から110年前の1906年に単身渡伯された明穂梅吉（あけほうめきち）氏に始まる。その20年後の1926年に当時の鳥取県海外協会が3,000町歩の土地を購入し、第二アリアンサと名付けたのが、第二アリアンサ鳥取村のスタートである。

第二アリアンサ鳥取村到着後、自治会館及び日本語学校を視察するとともに、「第二アリアンサ鳥取村入植90周年記念式典」に出席した。

第二アリアンサ鳥取村自治会館は、1986年の入植60周年に鳥取県からの寄付金を充てて建築されたものであるが、同村に居住する日系人をはじめとする関係者の交流の場として活用されており、地域の拠点機能としての役割を十分に発揮していることが確認できた。

また、鳥取県では、1994年から22年間にわたってこの地の日本語学校に教師を派遣しているところである。現在までに12名の教員が派遣され、若い世代への日本語指導や日本の社会事情・文化等の伝達に尽くしている。現在は17名の生徒が学んでいるが、生徒達の日本語能力は非常に高く、この村の日本語教育に対する思いの深さとその気持ちに応

えてきた本県からの教員派遣の成果によるものであると強く感じた。

なお、平成 28 年 5 月から 2 年間の任期で、大場諒（おおばあきら）教員が派遣されているが、訪問団の滞在中、住民や生徒達から大変慕われ、また頼りにされている様子を見ることができた。第二アリアンサ鳥取村の方々の母国・日本や日本語教育に対する思いの深さを知ることができた瞬間であり、本県と同村との文化交流を一層推進するためにも、今後も継続した教師派遣が必要である。

ブラジル各地から約 800 名の参加者を得て、盛大に開催された「第二アリアンサ鳥取村入植 90 周年記念式典」に出席した。式典は開拓物故者への黙禱に始まり、日伯両国国歌及び鳥取県民歌の斉唱の後、来賓がそれぞれ祝辞を述べた。

議会団を代表して、藤縄副議長から「長きにわたる様々な困難を経て、今日の実り豊かな大地を築き上げた先人に心から敬意を表する。ブラジルと鳥取県との交流が今後ますます地域・民間レベルで継続するよう、次世代の活動を担う人材育成に力を尽くす。」旨の祝辞を述べた。

このほか、第二アリアンサ鳥取村関係者からは、「先人達の大きな努力と犠牲が今の繁栄の土台となっており、誇りと感謝の念を忘れてはならない。高齢化が進んでいるが、村で日本語を学んだ子ども達が村外に出ても事あるごとに村の力になれるようにすることが我々の務めである。」とのあいさつがあり、住民の皆さんが先人の偉大な業績をいつまでも受け継ぎ、将来にわたって鳥取村を活力あるコミュニティにしたいとする強い情熱を感じることができた。

式典終了後、歓迎交流会として日本語学校生徒による発表とブラジル鳥取県人会による芸能披露が行われた。「しゃんしゃん傘踊り」や「銭太鼓」といった鳥取県の郷土芸能がステージ上で披露されたが、特に「しゃんしゃん傘踊り」はブラジルでも県人会の枠を超えて日系人社会に広がりを見せているとのことである。日本の伝統芸能や文化に触れることは、日本への理解や親しみにつながる近道であり、今後もぜひ、アリアンサ鳥取村やブラジル県人会で普及啓発活動に取り組んでいただくとともに、本県としても引き続き支援を行う必要性を感じた。

また、第二アリアンサ鳥取村における移住 1 世は数人となり、2 世も高齢化が進む中、今後の交流関係の継続や村の維持・発展のためには、3 世・4 世の世代が積極的に村の運営に関与することが課題となっており、日本語教育や日本文化を学ぶことによってブラジル社会・日系人社会に貢献できる人材の育成が急務となっている。

サンパウロ市内では、ブラジル鳥取交流センターを視察するとともに、ブラジル鳥取県人会の皆さんとの意見交換を行った。

ブラジル鳥取交流センターは、県人会活動の拠点として、会員相互の交流促進、日本文化や鳥取県 PR のため、平成 7 年 11 月に竣工した。交流スペースでは、しゃんしゃん傘踊り、ダンス、俳句、習字、日本語教室などの文化講座が毎日のように開催され、非常に有効に活用されているとのことである。また、有料で現地の方々にスペースを貸すなどの取り組みも行い、「鳥取県」の知名度向上に一役買っている。

ブラジル鳥取県人会の本橋幹久会長は、2014 年 3 月から 2016 年 3 月までブラジル日本

都道府県人会連合会の会長を務めるなど、鳥取県の枠を超えて、ブラジルと日本との架け橋となって精力的に活動されている。会長によれば、「海外技術研修員受入事業」「県費留学生受入事業」「中堅リーダー交流事業」などの各事業で訪日した若い世代の留学生は、帰国後1年間ほどは県人会の諸活動に参加するが、次第に離れてしまう現状があるとのこと。

また、県人会活動で中心的役割を果たしているメンバーの高齢化が徐々に進む一方、現在のブラジル日系人社会は、3世・4世の時代に入っていることもあり、職場や家庭で日本語を使う機会が減少している。このため、日本や鳥取県とのつながりが希薄化するのではないかとの危機感があり、次世代の交流を担う人材の育成に心を砕いている様子を伺うことができた。

ブラジルは、世界最大の日系社会であり、現在、約190万人の日系人が居住していると推計されている。多くの日系人は「勤勉」「正直」「信頼」という日本人の特性を受け継ぎ、ブラジル社会で高く評価されているとのことである。日本語能力の高さや日本文化との親和性を活かして日系企業に就職するなど、ブラジル各界で指導的なポジションに就くケースも多いようである。現在、ブラジルの政治・経済情勢には不透明感が広がっているものの、約2億人の人口を有し、世界第9位の経済規模を持つ世界有数の農業・資源大国である。日本企業の活発な投資状況や今後も拡大すると思われる日系社会等の状況を鑑みると、経済のパートナーとしても非常に重要な存在であり、これまで本県が取り組んできた各種事業を継続し、県人会とともに留学生・研修生OBとも連携を深めていくことが重要であることを確認できた。

このたびの訪伯中、どの訪問先でも訪問団を盛大に歓迎していただいたことに改めて感謝するとともに心からお礼を申し上げたい。また、第二アリアンサ鳥取村やブラジル鳥取県人会の皆さまと親しく話をさせていただくなかで、「母県」という言葉が何度も繰り返されたのが非常に印象的であった。これは取りも直さず、現地の皆さまが故郷・日本を離れ、大変な苦勞を重ねながらブラジルの大地を切り拓いた先人達を誇りにするとともに、自らのルーツが日本（鳥取県）にあることを大切に思っている、ということと、その気持ちに込められてきた鳥取県及び鳥取県議会の取り組みの成果であると確信する。

ブラジルと鳥取県とは距離的に遠いものの、お互いの心は深くつながっている。これまで長年に渡ってお互いが築き上げてきた両国・両地域の交流の架け橋がこの先も連綿と続くことを切に願うものである。そのためには、これからの交流を担う新たな人材の育成が最重要課題であり、県議会としても関係機関と連携を取りながら必要な支援に取り組んでいくとともに、交流の継続・深化に向けたメッセージを発信し続けていきたい。

4. 主な訪問日程

月 日	行 程	
7/20 (水)	17:15~22:00 23:40	鳥取 → 関西国際空港 関西国際空港発 (EK317 便 フライト時間 10 時間 10 分) 【機内泊】
7/21 (木)	04:50 08:35~16:30	ドバイ国際空港トランジット ドバイ国際空港 → グアルーリョス国際空港 (サンパウロ) (EK261 便 フライト時間 14 時間 55 分) 【サンパウロ州カンピーナス市泊】
7/22 (金)	08:25~09:45 11:15~14:40 15:00~17:30 19:00~	カンピーナス空港 → アラサトゥバ空港 (AD4378 便 フライト時間 1 時間 20 分) ミランドポリス郡庁訪問 ・ 郡長表敬訪問、ミランドポリス郡主催歓迎交流会、 郡議会議長表敬訪問 第二アリアンサ鳥取村訪問 ・ 自治会館及び日本語学校視察、共同墓地へのお参り 第二アリアンサ鳥取村関係者との夕食会 【第二アリアンサ鳥取村泊 (ホームステイ)】
7/23 (土)	09:30~17:00	第二アリアンサ鳥取村入植 90 周年記念式典出席 【第二アリアンサ鳥取村泊 (ホームステイ)】
7/24 (日)	08:00~11:00 11:00~12:00 14:05~15:15 17:30~19:00 20:00~	第二アリアンサ鳥取村の農園視察 (4 カ所) 第二アリアンサ鳥取村関係者との昼食会 アラサトゥバ空港 → カンピーナス空港 (AD4335 便 フライト時間 1 時間 10 分) ブラジル鳥取交流センター視察、ブラジル鳥取県人会との意見交換 ブラジル鳥取県人会主催歓迎交流会 【サンパウロ州サンパウロ市泊】
7/25 (月)	09:30~10:00 10:30~12:00 14:00~15:00 15:30~17:00	日本移民開拓先没者慰霊碑参拝 (イビラプエラ公園内) 松柏学院・大志万学院訪問 在サンパウロ日本国総領事館表敬訪問 ブラジル日本移民史料館視察 【ホテルで休憩後、空港へ】
7/26 (火)	01:25~22:55	グアルーリョス国際空港 (サンパウロ) → ドバイ国際空港 (EK262 便 フライト時間 : 14 時間 30 分) 【機内泊】
7/27 (水)	03:00~17:10 18:00~22:30	ドバイ国際空港 → 関西国際空港 (EK316 便 フライト時間 : 9 時間 10 分) 関西国際空港 → 鳥取



■サンパウロ州



■第二アリアンサ鳥取村周辺



5. 主な訪問結果

(1) ミランドポリス郡庁訪問（平成 28 年 7 月 22 日）

ミランドポリス郡は、サンパウロ市から西北西に約 600 km 内陸に入った、パラナ川に近い標高 400～500m の緩やかな高原地帯に所在し、牧場や農園に囲まれた人口約 26,000 人の地方都市である。行政区には、第二アリアンサ鳥取村を含むアリアンサ全区が含まれており、富山県高岡市と 1974 年に姉妹提携を締結している。

このミランドポリス郡庁を訪問し、鳥取県と第二アリアンサ鳥取村との交流の現状と今後の展望に係る意見交換を行った。なお、意見交換には、訪問団のほか、在サンパウロ日本国総領事館の中前隆博総領事及び第二アリアンサ鳥取村住民数名も同席した。

訪問団から、面談の機会をいただいたことに感謝するとともに、「今回の訪伯の大きな目的の 1 つは、ブラジルと日本との交流の歴史を再認識し、次の 100 年、200 年に向けて相互交流を進化させることにある。遠く日本をあとにした先人やその子孫が当地で大変な苦勞をしながらブラジル経済の発展の一翼を担ってきたことを誇りに思うとともに、日系人や鳥取県ゆかりの方々に対する郡を挙げてのご支援に感謝する。」と述べた。

これに対し、ミランドポリス郡のフランシスコ・アントニオ・パサレリ・モメソ郡長からは、遠く日本から訪問した訪問団に対する歓迎の意とともに、「ミランドポリス郡の日系人とともに暮らせていることは、自分にとって大きな誇りである。日系人の皆さんはこの町ひいてはブラジルの発展に大きな貢献をしている。感謝したい。」との発言があった。



郡長との意見交換



郡庁前にて

引き続き、モメソ郡長主催の歓迎交流会に出席した。交流会には、郡長及びミランドポリス郡庁関係者のほか、第二アリアンサ鳥取村住民数名も参加し、大いに交流を深めることができた。



郡長主催の歓迎交流会

交流会終了後には、ミランドポリス郡議会のニヴァルド・アパレスイド・ヒベイロ議長を訪問し、お互いにあいさつを交換した後、議場の案内を受けた。

ヒベイロ議長からも「ブラジル社会にとって、これまで日系人が果たしてきた役割は非常に大きいものがある。議長として心から嬉しく思う。」との言葉があった。

郡議会の定員は9名とのことであるが、その中には日系人のロベルト・カズシ・セキヤ議員もおられ、郡の発展のために奮闘しておられた。



ヒベイロ議長・セキヤ議員を囲んで



郡議会議場にて

(2) 第二アリアンサ鳥取村訪問（平成 28 年 7 月 22 日）

鳥取県からブラジルへ移住した方の数は、約 2,300 名で、戦前に約 2,000 名、戦後に約 300 名といわれている。

鳥取県からのブラジル移住の歴史は、今から 110 年前の 1906 年に単身渡伯された明穂梅吉氏に始まる。その 20 年後の 1926 年に当時の鳥取県海外協会が 3,000 町歩の土地を購入、第二アリアンサと名付け、鳥取村がスタートした。

その翌年、今の岩美町、当時の大岩村長の橋浦昌雄（はしうらまさお）氏が移民団を率い、5 家族 26 名の方々による第二アリアンサ鳥取村への本格的な移住が始まった。

第二アリアンサ鳥取村到着後、自治会館及び隣接する日本語学校を視察した。第二アリアンサ鳥取村自治会館は、1986 年の入植 60 周年に鳥取県からの寄付金 100 万円を充てて建築されたものである。その後、たびたび改修を行っているが、同村に居住する日系人をはじめとする関係者の交流の場として活用されており、拠点機能としての役割を十分に発揮していることがうかがわれた。

また、鳥取県では、1994 年から日本語学校に教師を派遣している。これは、1991 年に現地で指導していた日本語教師が亡くなり、その後の日系人子弟の日本語教育に支障をきたしていたことから、ブラジル鳥取県人会会長から鳥取県知事に日本語教師派遣に関する要請があり、実現したものである。

現在までに 12 名の教員が派遣され、若い世代への日本語指導や日本の社会事情・文化等の伝達に尽くしている。

なお、この日本語学校は、ブラジル国内の正式な学校ではなく、私塾的機関である。原則として、第二アリアンサ鳥取村に住む日系人の子ども、または向学心のある成人を対象としており、現在は、日本語レベル等によって 7 クラスに分け、幼児から高校生までの 17 名が学んでいる。授業数は、各クラス週 2 回程度とのことであった。

日本語学校到着後、訪問団の一員である教育委員会事務局の寺谷教育次長が、「植物の種」をテーマにした工作の授業を日本語で行った。授業の終わりには、日本から遠くブラジルまで植物の種が飛び、ブラジルの大地でたくましく根を張って成長してきたのがブラジルに住む日系人であることを子ども達に伝えた。

子ども達は、我々訪問団への歓迎の意味を込めて「鳥取」との文字があしらわれたポロシャツを着用してくれていた。生徒達の日本語能力は非常に高く、この地の日本語教育に対する思いの深さとその気持ちに应运えてきた本県からの教員派遣の成果によるものであると強く感じた。生徒がみな目を輝かせながら、生き生きとして寺谷教育次長の授業を受けていたのが印象的であった。



第二アリアンサ鳥取村自治会館



寺谷教育次長の授業風景



授業終了後に、生徒達と



生徒達による書道

なお、平成 28 年 5 月からは 2 年間の任期で、大場諒教員が派遣されているが、訪問団の滞在中、住民や生徒達から大変慕われ、また頼りにされている様子を伺うことができた。鳥取村の方々の母国・日本語教育に対する思いの深さに触れた瞬間であり、本県と同村との文化交流を一層推進するためにも、今後も継続した日本語教師の派遣が必要であると強く感じた次第である。

また、日本語学校視察後、村内にある共同墓地を参拝した。この共同墓地には、遠く日本を離れ、この村に移住された方やそのご子孫が眠っておられる。お亡くなりになった方には、再び日本の地を踏むことがなかった方も多くおられるとのことである。訪問団一同、大きな困難に直面しながらもそれを乗り越え、今日の実りある豊かな大地を築き上げられたことに対する畏敬の念を抱きながら、墓前に頭を垂れた。



ご案内いただいた前田ヒカルドさんと
(ご両親が鳥取県のご出身)

この日の夜には、第二アリアンサ鳥取村主催の歓迎夕食会に参加した。
藤縄副議長から、大きな歓迎に対する謝辞とともに、入植 90 周年を迎えたことに対する祝意と今後も双方の交流が末永く続くことを願っている旨、あいさつを行った。
夕食会には、鳥取村住民のみならず、ブラジル国内各地から約 200 名の参加者があり、訪問団一同、心温まる交流のひとつときを過ごすことができた。



あいさつする藤縄副議長



歓迎夕食会

なお、この日から 2 泊 3 日にわたって、第二アリアンサ鳥取村住民のお宅にホームステイをさせていただいた。どのご家庭でも訪問団を温かく迎えていただき、日本のこと、鳥取村のこと、ブラジルのこと等についての話に花が咲いた。

お世話になった前田ヒカルドさん、雁田信行さん、中尾秀隆さん、矢尾板暉埜さん、雁田米雄さんに改めて感謝の意を表したい。

【参考：第二アリアンサ鳥取村の概要】

世帯数：約 35 世帯 約 150 人（うち、鳥取県関係 3 世帯）

代表者等：第二アリアンサ日系文化体育協会 矢尾板暉埜 氏

その他：「アリアンサ」とは、ポルトガル語で「協同・共生」を意味する。

(3) 第二アリアンサ鳥取村入植90周年記念式典出席（平成28年7月23日）

ブラジル各地から約800名の参加者を得て、盛大に開催された「第二アリアンサ鳥取村入植90周年記念式典」に出席した。

式典には、前日表敬訪問したミランドポリス郡のモメソ郡長、ヒベイロ議長のほか、在サンパウロ日本国総領事館の中前総領事、ノロエステ連合日伯文化協会の安永会長などが来賓として招かれた。

式典は、開拓物故者への黙禱に始まり、日伯両国国歌及び鳥取県民歌の斉唱の後、藤縄副議長、野川統轄監ら来賓がそれぞれ祝辞を述べた。

藤縄副議長は、「当時は一面の原生林の中、過酷な自然環境や労働環境、不慣れな言葉、文化風習の違いなど、長きにわたる様々な困難を経て、今日の実り豊かな大地を築き上げた先人に心から敬意を表する。ブラジルと鳥取県との交流は、人的・文化的なものを中心として、長く続いている。県議会としても今後ますます地域・民間レベルでの交流を継続させるため、次世代の活動を担う人材育成に力を尽くして参る所存である。」と述べた。

野川統轄監からは、「ブラジル訪問にあたり、ブラジル鳥取交流センターに作品を寄贈している親友の画家・故わたせのぶあき氏の墓前に報告するとともに、ブラジルへ渡った過酷な移民の姿を描き、第1回芥川賞を受賞した石川達三氏の小説「蒼氓」を引き、当時の方々の艱難辛苦は想像しがたいものがある。ブラジルは共生・共存、多様性豊かな国家であり、鳥取村に対するこれまでの関係者の皆さまのご支援に心から敬意を表するとともに感謝したい。」との言葉が述べられた。

在サンパウロ日本国総領事館の中前総領事からは、「多くの先駆者が、勤勉・誠実な日本人の特性を活かし、困難な道を切り開いてきた。アリアンサ出身者は日伯友好に大きく貢献しており、日本人として誇りに思う。今年はリオ五輪があり、その4年後は東京五輪が開催される。日本とブラジルにとって非常に良い機会であり、友好関係の発展に力を尽くしたい。」との発言があった。

第二アリアンサ鳥取村関係者からは、「先人達の大きな努力と犠牲が今の繁栄の土台となっている。誇りに思うとともに感謝の念を忘れてはならない。鳥取村は高齢化が進んでいるが、村で日本語を学んだ子ども達が村外に出ても、事あるごとに村の力になれるようにすることが我々の務めである。」とのあいさつがあり、先人の偉大な業績をいつまでも受け継ぎ、将来にわたって鳥取村を活力あるコミュニティにしたいという強い情熱を感じることができた。

また、ブラジル鳥取県人会の本橋会長からは、西尾邑次元知事以来の鳥取県の支援に対する謝意が述べられるとともに、鳥取村における日本語教育の重要性に鑑み、今後も継続して教員派遣を行うよう要請があった。

来賓祝辞の後、藤縄副議長から「自治会館修繕に対する寄付金50万円」、野川統轄監から「ホワイトボード、机・椅子10セット、スクリーン」、それぞれの目録を第二アリアンサ日系文化体育協会の矢尾板会長に贈呈した。



来賓あいさつを行う藤縄副議長



目録の贈呈



会場を埋め尽くす式典参加者



式典出席者で記念撮影

午後からは、歓迎交換会として、「第二アリアンサ鳥取村日本語学校生徒による発表」と「ブラジル鳥取県人会による芸能披露（傘踊り・合唱）」が行われた。

日本語生徒からは、「大きなかぶ」の演劇、しゃんしゃん傘踊り及び銭太鼓が披露されたが、しゃんしゃん傘踊りには藤縄副議長も参加し、大いに会場を沸かせた。



演劇「大きなかぶ」の披露



生徒と副議長との傘踊り共演

鳥取県は、県内の代表的なお祭り「鳥取しゃんしゃん祭」で使用するしゃんしゃん傘をブラジル鳥取県人会に寄贈している。これまで、鳥取市が傘踊り指導者をブラジルに派遣するなど、現地でも県人会の枠を超えて日系人社会に広がりを見せているとのことである。なお、県人会傘踊りグループは 2009 年の第 45 回鳥取しゃんしゃん祭に招待され、「傘踊りの里帰り」を果たしたところである。



ブラジル鳥取県人会による
しゃんしゃん傘踊披露

(4) 第二アリアンサ鳥取村の農園視察（平成 28 年 7 月 24 日）

日本の約 22.5 倍もの広大な国土を有し、気候条件にも恵まれたブラジルは、世界有数の農業大国であるが、第二アリアンサ鳥取村でも農業が非常に盛んであり、ほとんど唯一の産業となっている。

このたびの訪問では、以下 4 軒の農園を視察させていただいた。

- ① 田中さん（レモン、アセロラ等）、②前田さん（グアバ等）、
- ③ 赤羽さん（ゴム等）、④大森さん（トウモロコシ、牛等）

それぞれの農園は、複数の従業員を雇用して非常に大規模化されているが、入植当時は一面の原生林であったこの地を、このような見事な大農園に発展させた先人の偉大な功績とそれを確かに受け継いでいる現在の住民の勤勉さに、訪問団一同、改めて頭の下がる思いがした。



レモン農家の田中さんから説明を受ける



赤羽さん栽培のゴムの木



大森さん栽培のトウモロコシ畑



農園をご案内いただいたみなさま

【参考：ブラジルの農業事情】

- トウモロコシ生産量 80,273,172 トン（2013 年）は、アメリカ、中国に次いで世界第3位。ブラジルが続くのが、アルゼンチン、ウクライナ。
- レモン・ライムの生産量（2013 年）は、世界第5位。インド、メキシコ、中国、アルゼンチンに続く。
- 天然ゴムの生産量 185,725 トン（2013 年）は、世界第8位。タイ、インドネシア、ベトナム、インド、中国、マレーシア、コートジボワールに続く。
- ブラジルが世界第1位（2013 年）の生産量を誇る農作物は次のとおり。
コーヒー豆、オレンジ、サトウキビ
なお、第二アリアンサ鳥取村でもサトウキビの栽培が盛んに行われていた。
- ブラジルが世界第2位（2013 年）の生産量を誇る農作物は次のとおり。
大豆、タバコ、パパイヤ

農園視察終了後、鳥取村自治会館で住民の皆さまとともに昼食をいただいた。
3日間にわたって村を挙げての大歓迎をいただいたことに対する謝辞を述べるとともに、再会を誓い合っ村をあとにした。

3日間の滞在で改めて強く感じたのは、ブラジルと鳥取県とは距離的には遠いものの、お互いの心は深くつながっているということである。鳥取村の住民の皆さんは「母国・日本、母県・鳥取県」への熱い思いを抱いており、先人達のこれまでの努力と苦勞を誇りとし、将来を担う若い世代へ受け継ごうとしている様子が感じられた。

ただ、鳥取村における移住1世は数人となり、2世も高齢化が進む中、今後の交流関係の継続や村の維持・発展のためには、3世・4世の世代が積極的に村の運営に関与していくことが課題となっている。

そのため、子弟の教育に熱心であり、日本語教育や日本の文化を学ぶことによって、ブラジル社会や日系人社会に貢献できる人材の育成に腐心している様子がうかがえた。

これまでお互いに深めてきた絆は、今後も継続して温めていく必要があり、県議会としても相互交流を担う人材の育成に力を尽くしていきたい。

(5) ブラジル鳥取交流センター視察、ブラジル鳥取県人会との意見交換 (平成 28 年 7 月 24 日)

第二アリアンサ鳥取村からサンパウロ市に移動後、ブラジル鳥取交流センターの視察とブラジル鳥取県人会役員との意見交換を行った。

ブラジル鳥取県人会は、1952 年に発生した鳥取大火に対し、郷土への救援募金運動のため、鈴木栄蔵（すずきえいぞう）氏、徳尾恒壽（とくおつねとし）氏らが中心となって設立された。各種記念行事や日本文化教養講座の開催のほか、県人会誌（伯因伯）の発行や母県との各種交流事業（留学生・研修員制度等）など、長年にわたって活発に活動しており、現在では約 300 家族が会員となっている。

同会の本橋幹久（もとはしみきひさ）会長は、2014 年 3 月から 2016 年 3 月まで「ブラジル日本都道府県人会連合会」の会長を務めるなど、鳥取県の枠を超えて、ブラジルと日本の交流の架け橋となって精力的に活動されているところである。

ブラジル鳥取交流センターは、県人会活動の拠点として、会員同士の交流促進、日本文化や鳥取県 PR のため、平成 7 年 11 月に竣工した。交流スペースでは、しゃんしゃん傘踊り、ダンス、俳句、習字、日本語教室などの文化講座が毎日のように開催され、非常に有効に活用されているとのことである。また、有料で現地の方々スペースを貸し出すなどの取り組みも行い、「鳥取県」の知名度向上に一役買っている。

意見交換会の席上、本橋会長はじめ参加者から、ブラジル鳥取県人会に対するこれまでの鳥取県の支援に感謝するとともに、今後も継続した交流活動に取り組んでほしい旨の要請があった。

鳥取県とブラジルとは、「海外技術研修員受入事業」「県費留学生受入事業」「中堅リーダー交流事業」などに取り組んでいるところであるが、これまでに海外技術研修員受入事業で 38 名、県費留学生受入事業で 63 名、中堅リーダー交流事業で 12 名の方々が鳥取県での専門分野の習得に努め、帰国後はそれぞれの分野で活躍されている。

本橋会長によれば、各事業で訪日した若い世代の留学生は、帰国後 1 年間ほどは県人会の諸活動に参加するが、次第に離れていってしまう現状が散見されるとのこと。

また、県人会で中心的役割を果たしているメンバーの高齢化が徐々に進む一方、現在のブラジル日系人社会は、3 世・4 世の時代に入っており、職場はもとより家庭において日本語を使用したり、日本文化に触れる場が減少している。このため、日本や鳥取県とのつながりが希薄化するのではないかと危機感を会長や役員の方々は日常的に感じておられる様子である。

このため、次世代の交流を担う人材を育てるためには、訪鳥経験のある留学生を巻き込むことが必要不可欠であると考えておられ、その手立てをいろいろ練っておられるところである。

その一つとして、これまでの留学生が資金を出し合って、鳥取県人（メディア関係者を想定。2 名程度）をサンパウロに 2 週間程度招待し、ブラジル鳥取県人会の活動や第 2 アリアンサ鳥取村の様子等取材していただくような企画を検討しているとのこと。募集にあたっては、鳥取県にも協力してほしいとの要請があった。

また、今年度の「中堅リーダー交流事業」で鳥取県に派遣される方からは、研修内容

の希望として、「ハウス栽培」「有機農業」「干し柿（あんぽ柿）」「太陽光発電」について学びたいとの希望が寄せられ、今後、調整することとした。

7月8日から10日に開催された南米最大の日本まつり「フェスティバル・ド・ジャポン」についても説明があった。このまつりは、ブラジル日本都道府県人会連合会が毎年開催し、約17万人程度の多くのブラジル人が来場する一大イベントである。ブラジル鳥取県人会もブース出展し、和牛牛丼1,300食、大山おこわ数百食を売り上げた。併せて観光PRも行ったが、「食」のほかに「マンガ」が来場者に人気があったとのことである。水木しげる先生や青山剛昌先生をはじめ、まんが王国とっとりが誇るコンテンツの可能性をこのブラジルでも感じる事ができた。

なお、県人会から、所有するPRポスターには古いものが多く、新しいポスターやビジュアルとして「映える」宣伝資材の希望があり、早速対応することを約束した。



ブラジル鳥取交流センター



交流スペースを有料で貸出（ダンス教室）



意見交換の様子



本橋会長を囲んで

(6) ブラジル鳥取県人会主催歓迎交流会（平成28年7月24日）

ブラジル県人会との意見交換のあと、サンパウロ市内で、県人会主催の歓迎交流会に出席した。県人会からは、老・壮・青の幅広い世代から約20名の参加があった。

ブラジル日系人社会の現状やブラジル一般家庭の様子、県人会や母県に対する思いなど、様々な話題についてお伺いすることができた。

また、交流会に参加した県人会の若い世代の方の中には、海外技術研修員受け入れ事

業で訪鳥経験がある方もおり、日本での思い出もお聞きすることができた。

ブラジルは、世界最大の日系社会であり、現在、約 190 万人の日系人が居住していると推計されている。多くの日系人は「勤勉」「正直」「信頼」という日本人の特性を受け継ぎ、ブラジル社会で高く評価されているとのこと。高学歴化が進み、いわゆる知的専門職（政治家、法曹界、外交官、医師、学者等）に多数進出するとともに、日本語能力の高さや日本文化との親和性を活かして日系企業に就職するなど、ブラジル各界で指導的なポジションに就くケースが多いように見受けられる。このような現状からも、これまで本県が取り組んできた各種事業を継続し、県人会とともに留学生・研修生OBとも連携を深めることの重要性を感じた。



加藤元会長のご発声で乾杯



ブラジル鳥取県人会員の皆さん

(7) 日本移民開拓先没者慰霊碑参拝（平成 28 年 7 月 25 日）

ブラジル日本都道府県人会連合会の山田康夫会長、谷口眞一郎副会長にご案内いただき、サンパウロ市イビラプエラ公園内にある日本移民開拓先没者慰霊碑を参拝した。

現在では、ブラジル社会のあらゆる分野で活躍する日系人の姿をみることができるが、今日の繁栄は、初期開拓移民の苦難の歴史の上に成り立っている。初期開拓移民の多くが厳しい生活環境の中で倒れ、荒れ果てた無縁墓地で祀る人もないまま眠っていることに心を痛めた日本海外移住家族会連合会の故・藤川辰雄事務局長らが中心となって建立の呼びかけが行われた。1975 年の建立以来、天皇皇后両陛下や皇族方、内閣総理大臣などの政府高官、各都道府県訪問団、一般訪伯団が多数参拝に訪れている。

なお、最初の移民を乗せて神戸港を出港した笠戸丸が 1908 年 6 月 18 日にサントス港に入港したことにちなみ、毎年 6 月 18 日を「移民の日」としているが、この日に執り行われる慰霊碑参拝は、現在では欠くことのできないブラジル日系社会の公式行事となっている。

訪問団一同、慰霊碑に献花し、先没者のご苦勞に思いを致し、哀悼の意を表した。その後、慰霊碑礎石の下にある先駆移民の御霊を合祀した霊廟に進み、平和慈母觀世音菩薩木像と地藏尊を前に焼香し、冥福をお祈りした。最後に訪問団員それぞれが思いを込めて記帳を行った。



日本移民開拓先没者慰霊碑



慰霊碑の前で



記帳の様子



山田会長、谷口副会長と記念撮影

(8) 松柏学園・大志万（おおしまん）学院訪問（平成28年7月25日）

平成27年1月に来県するなど、過去13回にわたって本県に訪日使節団を送り、伝統文化や産業の体験、ホームステイ、高校生交流を行っている松柏学園・大志万学院を訪問した。

松柏学園は、1952年に川村真倫子（かわむらまりこ）氏が日本語学校として松柏塾を開校し、1966年に現在の名称に改称したものである。教育方針として、「日本語の読み書きに熟達するとともに、日本語による意思表示ができるようにする。」「日本語を通じて日本文化を理解し、ブラジル国の向上に役立て、地球の平和に貢献できるブラジル人を養成する。」「情操と道徳の教育に力を入れ、知・情・意の調和のとれた円満な人格の養成に努める。」の3つを掲げ、教育にあたっている。

また、川村真倫子氏は、1993年に日本語教育を幅広く、また末永く継続させる目的で大志万学院を設立した。現在、松柏学院と大志万学院の日本語授業は同じ建物で実施されているが、松柏学園は語学学校であるのに対し、大志万学院はブラジル教育局の規則に基づいた幼・小・中学校として運営されている。現在は、娘である川村真由美（かわむらまゆみ）氏が校長を務めておられ、休校中であるにも関わらず、訪問団に学校の概要を説明していただくとともに、校内を案内して下さった。校内の至る

所に日本語や日本文化を感じる展示物があふれ、日本語教育が徹底されている様子を伺うことができた。

川村校長からは、日本語能力を向上させるために小倉百人一首を学ばせていることや1歳半から英語・スペイン語・日本語・ポルトガル語を学ばせていること、茶道や華道、書道など日本の伝統文化も取り入れていること、生徒達はマンガを通して日本語に興味を持つことが多いことなどについてご説明をいただいた。

また、学校設立当時の問題意識の1つが「ブラジルから日本語が無くなることへの危機感」であったが、今でもブラジルにおける日本語の危機感はあまり変わらず、日系人が日本語を覚えなくなる傾向がある一方、ブラジル人の学習意欲が高まっているとのこと。これは、日系人家庭で日本語を使う機会や場所が減ってきていることに起因しており、最低でも1日に「50分間を2回程度」日本語を話すようにしないと、この傾向は改善されないだろう、とのことであった。

さらに、学校経営に対するご苦勞もお話になり、ブラジルでは私立学校に対する税制上の優遇措置は無く、補助制度も存在しないこと、私立学校は公立学校にとってある意味、敵のような存在となっていることなどをお聞きした。

経営に対するご苦勞を抱えながらも、「日本語を通してブラジル国家に貢献する人材を養成する。」という明確な目的意識を持って、日々教育にあたっている校長先生はじめ教職員のみなさんの姿勢には、訪問団一同、感銘を受けた。

なお、学費は月に約3,000レアル（約9万円）と高額であるが、サンパウロ市内の私立学校では比較的安価な部類に入るとのことである。

7月は休校期間中のため生徒の数は少なかったが、居合わせた生徒は皆、礼儀正しく、にこやかにあいさつを交わしてくれた。校長先生の教育方針が生徒1人1人によく浸透していることを感じることもできた。



学園概要の説明



学園内の和室



教室内の机は特徴的に配置



画一的ではない、子ども達手作りの道具入れ



196 席を有するホールも整備



学校の皆さんと記念撮影

なお、大志万学院のみなさんは、「第 21 回ブラジル少年少女訪日使節団」として、平成 28 年 12 月下旬から 2 月上旬まで来日され、1 月下旬には 4 泊 5 日の予定で鳥取県を訪れる予定である。来県中は、ホームステイやスキー体験を行うとのことであるが、お互いに再会を約束し、学校をあとにした。

(9) 在サンパウロ日本国総領事館表敬訪問（平成 28 年 7 月 25 日）

在サンパウロ日本国総領事館の中前隆博総領事を訪問し、総領事からサンパウロ州の概観や政治・経済情勢をはじめ、日系社会の現状や現在建設中の「ジャパン・ハウス」について説明を受けた。

中前総領事からの説明概要は次のとおりである。

サンパウロ州の面積はブラジル全体の約 3% 程度であるが、人口は約 4,400 万人であり、国全体の約 22% を有する。19 世紀にコーヒー栽培や鉄道建設によって都市に発展。20 世紀に入ると工業都市に成長するとともに、日本からの移民が始まった。現在では、ブラジルの農業、商工業、金融業、航空産業等の中心都市であるとともに、南米最大の都市である。

ブラジルは世界第 9 位の経済規模（2 年前は世界第 7 位）を持つ世界有数の農業・資

源国である。産業構造は第3次産業のウエイトが大きくなっている。GDP成長率は2014年が0.1%、2015年が-3.8%、今年は-3.5%（予想）と下降基調にある。これは中国景気の減速や一次産品の価格下落、市場信用の低下等によるもの。喫緊の課題は経済回復と財政調整であり、本年度は赤字予算案1,700億レアルとなっている。

サンパウロ州はブラジルGDPの約3割を占める巨大な経済都市である。IT産業、金融業、製造業、輸送業などが多く立地している。日系企業も多く、2015年現在、698社がこの地に進出している。とりわけ製造業、卸売・小売業が多い。

日本からブラジルへの移住者は、戦前約18.9万人、戦後約5.4万人を数えるが、現在、世界最大の約190万人の日系人が居住していると推計される。移住者は歴史的に農業分野で活躍し、ブラジル農産物の改善・品種改良に大きく貢献した。ブラジル社会における日系人のイメージは非常によく、高く評価されている。

また、総領事館の役割として、これまでの単なる移住者支援にとどまることのない新たなチャレンジを検討しているとの発言があった。具体的なものの1つが、約14万人存在すると推計する「本邦就労帰伯者及びその子弟」への支援である。こういった方々は現在の日本をよく知っており、ブラジルと日本とをつなぐ貴重な存在であるが、県人会等に属さず、組織化されていないのが実情である。こういった方々に光を当てる施策展開を行いたいとのことである。

また、世界で「ロンドン」「ロサンゼルス」「サンパウロ」の3カ所に開設されるジャパン・ハウスについても言及があった。（サンパウロは2017年3月開設予定。）

東京オリンピック・パラリンピックの新国立競技場の設計者でもある隅研吾（くまけんご）氏が設計を手がけ、ヒノキを用いたファサードが特徴的な建物となる予定である。

総領事館としては、このジャパン・ハウスを単なる物販の場だけにとどまらせるつもりはなく、日本をどう見せていくかという点で推進させていくことにしており、いずれかの段階で、各県にも相談させていただくとのことであった。



中前総領事表敬訪問

訪問団からは、第二アリアンサ鳥取村入植90周年記念祭にご出席いただいた事への謝意と併せ、今後の支援について要請した。

総領事には、大変ご多忙の中、長時間ご説明いただいた事に感謝したい。

(10) ブラジル日本移民史料館訪問（平成 28 年 7 月 25 日）

ブラジル日本移民史料館は、サンパウロ市内の日伯文化協会ビルの 7～9 階にある日本移民の生活と社会背景を伝える史料館である。1978 年の移民 70 周年を記念して開館した。パネルや模型、ビデオなどを使って、1908 年の笠戸丸から始まった日本人移民の軌跡を紹介している。

館内では、ブラジル日本文化福祉協会の山下リジア副委員長に大変懇切丁寧にご説明いただいた。コロノ（移住地）の生活、植民地建設、生活の工夫、移民の楽しみ、産業育成など具体的なテーマが年代順に紹介されており、これまでの歴史を良く理解することができた。

7 階展示場には、1895 年の日伯国交樹立から移民受入のための制度・枠組みが定められる間の資料が展示されていたが、特に移民船「笠戸丸」の模型は目を引いた。また、再現された開拓小屋の質素さには、当時の方々のご苦勞を偲ぶことができた。

8 階展示場は「日本移民の貢献」「ブラジルと日本が対立した第二次世界大戦」「戦後直後のブラジルにおける日系社会の再編成」の 3 つのテーマによって構成されている。日本とブラジルとが対立した先の大戦は、日本移民史において最も暗い時代であり、日本移民に加えられた制限や日本人同士での対立の歴史について、説明を受けた。

9 階展示場は 50 周年を迎えた戦後移民の様々な局面や音楽・舞踊・文学等の各分野での日伯交流について展示されていた。その中でも平成 10 年の歌会始で皇后陛下が詠まれた御歌「移民きみら辿りきたりし遠き道に イペーの花はいくたび咲きし」が掲示されており、先人が乗り越えてきた苦難の歴史を端的に感じることができ、訪問団の心を強く打った。

故郷を遠く離れ、過酷な自然環境や労働環境、言葉や文化の違いなど、長きにわたる困難を乗り越え、ブラジルの発展に貢献してきた先人の存在は我々にとっても大きな誇りであるとともに、歴史を正しく理解した上で、今後の日伯交流を発展させることの重要性を改めて認識した。



山下副委員長から説明を受ける訪問団



ブラジル移民資料館を訪問した訪問団